様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 １ 月 １８ 日現在

機関番号：２１６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０７９９

研究課題名（和文）日本占領下の海南島における衛生・医療政策

研究課題名（英文）Hygiene and health policy of Hainan Island under Japanese occupation

研究代表者
中川　恵子（末永恵子）（NAKAGAWA, KEIKO）

福島県立医科大学・医学部・講師

研究者番号：１０３１５６５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アジア太平洋戦争期の日本軍占領下における海南島の衛生・医療政策についてその実態を明らかにすることを目的とした。特にペスト防疫を実施した軍の史料をもとに海南島のペスト流行と防疫活動の実態を明らかにした。軍側はこの防疫活動を成功例として喧伝した。しかし、ペスト防疫のために隔離をはじめ住宅を焼き払われるなど、生活に大きな損害と規制を受けた。さらに、海南島の防疫・医療には、博愛会や同仁会などの医療支援団体が動員された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to show how the policy of the hygiene and medical service was carried out under Japanese occupation in the Hainan Island during the Asia-Pacific war. I especially used the historical documents of the prevention of plague written by the army to describe the epidemic and the prevention of plague in the Hainan Island. Although the army proclaimed that the prevention of plague was successful case, the people in the island were suffered from the prevention of plague. For example, the people have suffered serious damage from isolating patients and destroying houses by fire. The Hakuaikai and the Dojinkai, the groups of medical activities, took part in the medical service.

研究分野：日本史

キーワード：戦争　防疫　731部隊　海南島

１．研究開始当初の背景

筆者は、医療支援団体である同仁会や博愛会についての研究に取り組んできた。同仁会は、主に中国華北・華中への医療支援を担い、博愛会は、中国華南や海南島への医療支援を行った。日本の影響下にあった地域に進出して日本の医療を実施した医療団体の実態と地域社会の関係を明らかにすることで、日本の植民地医学がどのように東アジアに配置されたのかを探ってきた。

日中戦争中、日本軍は中国大陸に占領地を拡大するが、日本軍は海南島にも侵攻していった。1939 年 2 月、日本軍が奇襲上陸し占領したこの島では、鉱山開発に伴い、鉄道、港湾、道路、ダムの建設がお行われ、急激な人口流入が起こった。占領地における医療体制の整備という課題に関係当局は直面した。占領期を通してどのように医療政策が策定され、実際にどのような医療が実施されたのか、これまでほとんど具体的に明らかにされてこなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、日中戦争期の中国海南島における衛生・医療政策とその実態を分析することによって、日本の植民地医学の中国における進出とその展開を明らかにすることにある。申請者がこれまで進めてきた「満州」と中国の華北および華中、華南における植民地医学の分析をふまえ、占領地海南島の衛生・医療についての調査を行うことにより、日本による中国への植民地医学進出の解明が前進するものと考える。

３．研究の方法

文献資料の収集、資料の目録作りおよび読解をすすめ、資料の解釈・分析をおこなうことで、衛生・医療政策の実態に迫る。海南島の衛生事業に関する文書を作成者により大まかに分類すると以下のようになる。

・医療支援団体
・台湾総督府関係者
・軍
・外務省
・海南島への進出企業

現在軍関係者の文書から、軍による防疫の実態を描いた。「海南島におけるペスト防疫」（『１５年戦争と日本の医学医療研究会会誌』16 (2)、2016、ｐ.32 － ｐ.42）

そして現在、軍以外の衛生・医療政策を分析し、解釈している途上にある。

４．研究成果

日中戦争期の日本軍が占領した海南島におけるペスト防疫について明らかにした。1939 年（昭和 14）同島で発生したペストは流行に対して軍は強圧的な防疫を実施した。この防疫に見られる軍の論理を明らかにした。

すなわち、海南島におけるペスト防疫は、軍による軍のための防疫であり、現地民に対する衛生管理もペストを軍に波及させない目的のものと言えよる。この防疫は細菌戦における訓練でもあった。このことは、汚染地であっても軍は作戦を実施するということを意味する。したがって、防疫は作戦遂行に資することを最優先の目的としており、将兵の健康を第一義としたわけではなかった。そのことは、汚染地からの撤退や流行地での討伐中止という選択がなれなかったことに示されている。

駐留を続けるしかない状況では、防疫を徹底するしかない。軍は、当然のこととして家屋の焼却、捕鼠、予防接種、強制隔離、交通遮断等を実施したが、それが現地住民生活へ与えた影響は大きかった。住民にとっては、ペストそのものももちろん脅威であるが、ペスト防疫下の定安で人々の活動は麻痺状態となり、いわば防疫による戒厳令をつくり出すことになった。

大規模で強権的なペスト防疫が 731 部隊を中心に行われた。まさに自作自演であるが、菌散布からペスト流行後の防疫活動までもが事前に計画されていた。

海南島の防疫に見られるように、防疫にあたる軍の占領地への支配は通常よりも格段に強まる。そのような海南島のペストの制圧は、ペスト汚染地でも作戦を続行し占領を継続する先例として位置付けられた。

さて、まだ論文としては、まとめていないものの、新しい事実やテーマを得ることができた。それを以下、記していきたい。

・海南島施策の方針

海南島全体としては、熱帯性マラリア、赤痢、トラホーム、蛔虫病特に鉤頭虫が蔓延していた。

海南島占領後すぐの 1939 年 3 月 1 日、現地の陸軍・海軍・外務省の三省からなる海口連絡会議では「住民ノ文化ハ実生活ニ則シ且日本文化ト関連セシメツツ其ノ向上ヲ計ルモノトス」とされ、日本文化を注入することとともに、「邦人指導ノ下ニ速カニ衛生機関ヲ整備シ住民ノ保健ニ貢献セシム」とされ、衛生機関の整備が決定された。

・博愛会について

海南島に進出した博愛会についても改めて検証を深めることができた。博愛会は、華南地域を舞台に、医療を展開していた財団法人であった。しかし、事実上台湾総督の経営になるもので、その成立は大正期に遡るが、中国の軍閥時代に幾多の動乱および排日・排日貨を経験しつつ、診療を継続していた。そのような経験を有した医療団体が、アジア太平洋戦争期になると、事実上軍の指揮下に入ることとなる。やはりそこには、医療団体の変質がみられる。今後の課題としては、これ

らの資料を分析し、学会誌にまとめたいと思う。

・同仁会について

海南島が占領されると医療支援団体としてはじめ派遣されたのは、博愛会であった。しかし、南方への戦線の拡大にともない、タイ等に移動し、それに換わって同仁会が派遣された。同仁会医院は、海南島の各地に分院を置いただけでなく、衛生研究所も併設し、海南島におけるマラリア対策などを研究していた。敗戦時に中国側に接収された施設や物品目録を見ると、相当の医療機器や実験具があったことがうかがわれ、海南島において本格的な医療の展開と、医学研究がいとされていたことがうかがわれた。

博愛会の医師は台湾総督府から派遣される技師も多かったが、同仁会の医師は、内地の大学からも派遣された。

・開発会社の衛生施設（日窒および石原鉱山）

鉱山開発企業の病院は、大規模で両企業病院の病床数は、1791 床にのぼった。医師や看護紙数も比較的多かった。

・人類学・社会学的研究

当時医学者によって海南島の疾病に関する研究もすすめられ、感染症関係の雑誌論文や博士論文もあらわされているが、それらについても今後報告したい。

また、海南島の少数民族に関する人類学的あるいは社会学的研究も、尾高邦雄や岡田謙らによってなされている。少数民族の黎族を海南島開発のための労働力として期待していたこともあり、詳細な調査が計画されていた。尾高邦雄は、「治安策としては、黎界を以つて漢族殊に敵匪に対する緩衝地帯となし、軍事基地背後の安定を図るべきであり、開発策としては、黎界資源の利用のみならず、黎族そのものをして開発労働力の補給源たらしめなければならない。しかるにこれらの政策を十分に遂行せんとすれば、まづ以つて黎族事情に関する学術的調査を必要」とのべている。

このように学術研究と資源開発および戦争遂行は不即不離の形で進んでいった面があることが、具体的に明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 戸田正三と興亜民族生活科学研究所（上）１５年戦争と日本の医学医療研究会会誌、査読無　１８（１）2017、7-22

② 末永　恵子、７３１部隊における昆虫学者篠田統の活動、１５年戦争と日本の医学医療研究会会誌、査読無　１７（2）、2017、7-16

③ 末永　恵子、海南島におけるペスト防疫、１５年戦争と日本の医学医療研究会会誌、査読無、 16（2）、2016、 32 – 42

〔学会発表〕（計　７件）

①末永　恵子、興亜民族生活科学研究所と戸田正三、15 年戦争と日本の医学医療研究会第４１回研究会、2017 年３月

②末永　恵子、細菌戦と昆虫学者・篠田統、１５年戦争と日本の医学医療研究会第４０回研究会、2016 年 11 月

③末永　恵子、戦地の医学―７３１部隊における兵要衛生地誌の作成–、日本科学者会議第２１回総合学術研究集会、2016 年 9 月

④末永　恵子、満洲医科大学と地域社会、第４回ワークショップ「満州の科学・医学史、核をめぐる戦時科学の連続性：研究の最前線から」、2014 年 12 月

⑤末永　恵子、後方支援としての医療―アジア・太平洋戦争における軍陣医学の実態―日本科学者会議第２０回総合学術研究集会、2014 年 9 月

⑥末永　恵子、後方支援としての医療―アジア・太平洋戦争における軍陣医学の実態、第１５回ヒューマン・エシックス研究会 、2014 年 9 月

⑦末永　恵子、台湾総督府による中国華南地域への医療支援、第１１５回日本医史学会総会、2014 年 5 月

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中川（末永）恵子（NAKAGAWA, SUENAGA, Keiko）
福島県立医科大学・医学部・講師
研究者番号：10315658

(2)研究分担者
（　０　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　０　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　０　）